

第 275 回新潟外科集談会

日時 平成 25 年 5 月 11 日 (土)
午後 1 時～午後 4 時 33 分
会場 新潟大学医学部 有壬記念館

2 当科におけるトリプルネガティブ乳癌症例の検討

金子 耕司・佐藤 信昭・神林智寿子
橋本 喜文・結城 大介・會澤 雅樹
松木 淳・丸山 聡・野村 達也
中川 悟・瀧井 康公・藪崎 裕
土屋 嘉昭・梨本 篤*・本間 慶一

県立がんセンター新潟病院 外科
同 病理*

一般演題

1 当科における乳癌センチネルリンパ節生検

辰田久美子・小山 論・長谷川美樹
坂田 英子・利川 千絵・萬羽 尚子
五十嵐麻由子・若井 俊文

新潟大学 消化器・一般外科学分野

当科では 1999 年から乳癌に対する色素法でのセンチネルリンパ節生検 (SNB) を開始し, 2002 年からは RI も併用している. SNB を行う条件は, SLN の同定率 95 % 以上, 偽陰性率 5 % 未満とされ, 当科では, RI 併用を開始した 2002 年から 2012 年までに 480 例で SNB を施行し, SLN の同定率は 99.4 %, 偽陰性率は 6.5 % であった.

SLN として 1～4 個 (平均 2.7 個) のリンパ節が摘出されることが多いが, 時に多数のリンパ節が摘出されることがある. 摘出された順番ごとの転移率を見ると, 5 番目以降にも転移がみられている. しかし摘出数の多い症例では複数のリンパ節に転移が認められ, 実際には 3 番目以内の SLN で転移陽性の診断が付く症例がほとんどである. SLN 転移症例 86 例での転移 SLN 同定率は RI & 色素陽性は 71 例 (82.5 %), RI 陽性のみ 6 例 (7.0 %), 色素陽性のみ 6 例 (7.0 %) であった. 本来は SLN ではない, RI & 色素陰性のみ転移があった症例は 3 例 (3.5 %) であり, 注意が必要である.

【背景】トリプルネガティブ乳癌 (以下 TNBC) とはエストロゲン受容体 (ER), プロゲステロン受容体 (PgR), HER2 (human epidermal growth factor2) のいずれもが陰性とされる乳癌のサブタイプであり, あきらかな治療標的がなく, 殺細胞的な化学療法しか適応されず, 治療に難渋することが多い.

【対象・目的】2009 年 1 月から 2012 年 12 月までの当科での手術症例 1,329 例のうち, 術前後病理検査にて ER 陰性, PgR 陰性, HER2 陰性を確認された 126 例を対象とし, TNBC の臨床病理学的特徴を探ることを目的とした.

【結果】年齢中央値は 58.0 歳 (23-90 歳), 閉経前 42 例, 閉経後 83 例. 治療前 Stage は I : 51 例, II : 61 例, III : 11 例, IV : 3 例, 組織型は sol-tub が 71 例で 56.3 % を占めていた. Ki67 labeling index の最頻値は 90.0 %, HG III は 45.2 % で増殖能は高いと考えられた. 術前化学療法施行した症例は 52 例で, cCR : 14 例, cPR : 30 例, cSD : 5 例, cPD : 4 例. 術後補助療化学療法は 37 例に施行. 術前後約 7 割の症例に薬物療法が施行されていた. 再発を 20 例に認め, 再発時期の中央値は 7.9 ヶ月で, 主な再発臓器は肺・脳で, 死亡は 10 例であった.

【考察】TNBC は集学的治療を行ったとしても予後不良の集団が存在する. トランスレーショナルリサーチによる治療目標の探索が重要と考えられた.